

論文の内容の要旨

論文題目 ルイス・カーンの建築作品に関する研究
—軸構成と「ずれ」の手法

氏 名 尹 東植

ルイス・カーンは大学時代ポールク・レーの指導の下でボザール建築を学んだ。ボザールは建築構成上の幾何学的な調和を重要視し、平面に軸性や左右対称性に基づいた厳格な幾何学的構成という特徴を持っている。この特徴はルイス・カーンの建築で、ボザールの影響で近代建築では否定された軸性、対称性、中心性、モニュメンタリティなどの特徴がみられることは既に指摘されてきた。しかし、カーンは卒業後モダニズムの洗礼を受けているだけ、グリッドによる空間構成、主軸からの離脱の要素の導入などモダニズム的要素も同時に存在している。

本論文では上述のようなルイス・カーンの建築に共存する異なる二つの特徴に着目する。ボザール建築の最も基本的な特徴である軸による対称構成とそれに反する軸構成に対する離脱(本論文ではずれとよぶ)がそれであり、カーンの建築全体を通して現れる空間構成の原理とも言える。本論文では「軸構成とずれ」の観点からルイス・カーンの建築を再解釈するとともに、「軸構成とずれ」によって生じる視知覚的效果を明らかにすることを目的とする。

まず、ルイス・カーンの全作品の中から共同作品、都市計画、公共事業などを除く全 53 の作品に関して軸構成とずれがどのように生じているのかの分析を行った。

分析の結果、ほとんどの作品で明確な軸構成がみられ、軸構成の特徴によって 4 つの類型に分けられる。

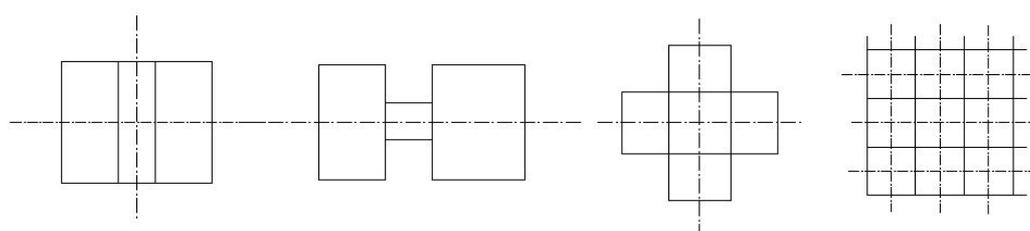


図1 軸構成の類型

カーンの作品の軸構成において生じるずれは大きく二つに分けられ、一つは建物的ずれであり、もう一つは動線のずれである。建築的ずれはプロセス上の変形によって軸構成が崩れた場合に生じるずれと、強い軸構成のなかにそれに反する要素をいれることで生じるずれがあり、動線のずれはアプローチ軸と内部動線軸および視覚軸が構成軸と不一致によって生じている。

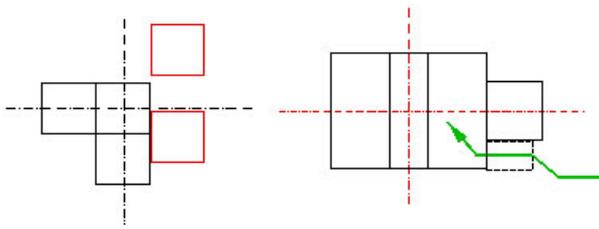


図2 建築的ずれと動線のずれ

各類型別に生じるずれの手法は異なったりするが、全体を通して何らかの形でずれが生じていることがわかる。

以上の分析結果をふまえて「軸構成とずれ」によって生じる視知覚的分析を行った。

「軸構成とずれ」によって生じる観察者の行動と視覚像の変化は次のように各段階に分けてまとめられる。

■アプローチのずれ

アプローチ軸は2つに分けられ、2種類の軸を組み合わせることでアプローチさせている。一つは建物の横を通り過ぎる軸で、観察者が進むにつれて建物の視覚像が回転する。もう一つは建物に向かって進む軸で、視覚像は回転せずにズーム・インでエントランスの確認、ファサードの詳細などがわかってくる。

また二つのパターンで組み合わせられ、一つは「建物の横を通り過ぎる軸+建物に向かって進む軸」、もう一つは逆順を取っている。

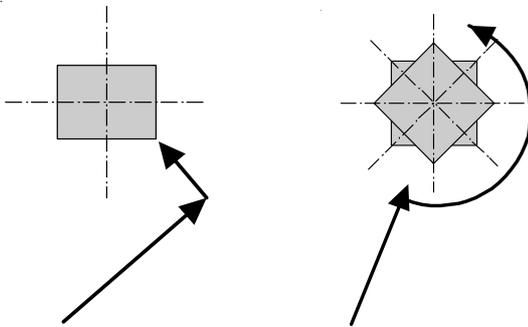


図3 アプローチのずれ

これらは運動感のある、多様な視覚像の形成による正面性のあいまい化につながり、建物は一つのイメージとして正面を見せ付けることなく多様な視覚像を見せる。また観察者は視覚像の回転と拡大という知覚過程の中で、観察者による建物の明確な輪郭、中心を知覚することができる。

■エントランスのずれ

ボザール建築ではエントランスが構成軸上に位置することに対して、カーンの建築では軸からはずれたところに設けられており、次の現象が起こる。

一つはエントランスの隠蔽である。一般的に建物に向かうときエントランスは最初の目的先で、強い視覚対象となり、他の部分は背景となる。しかし、エントランスの隠蔽によって目的先が確定できず、視覚対象は建築全体となる。すなわち視線は固定されずに建物全体を動き回る、いわゆる探索の過程が生じる。

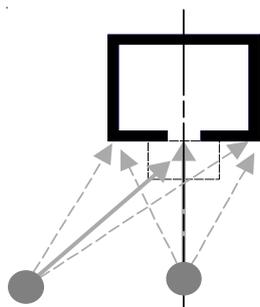


図4 視覚対象がエントランスの場合

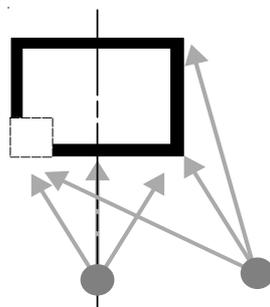


図5 視覚対象が建築全体の場合

もう一つは斜めの視線軸の形成である。斜めの視線は物理的に視覚軸の長さが伸びるだけでなく、角の線が形成する軸が多様となり、動的な空間が形成される。また動きによって角の方向が変わるのでさらに動的な空間と感じられる。

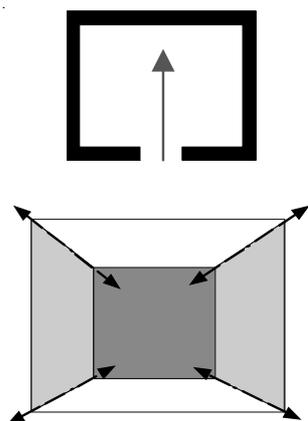


図6 軸上の視覚軸

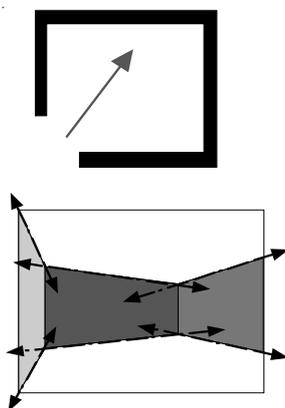


図7 斜めの視覚軸

また空間の知覚において、軸上の視線ではバランスの取れた1消点の空間として、一瞬して認識されるに対して、斜め視線では空間像の不均衡から、バランスをとろうとする視線の旋回が生じ、それによって空間を限定する面が継起的に認識される。また空間を限定する各要素の継起的展開は空間の輪郭を明確にするだけでなく、回転による中心の生成にもつながる。

■内部動線のずれ

カーンの作品では動線を軸からずらし自由な動きをさせることで多様な空間体験ができる。メロン・センターが代表的な例で、軸と動線をうまく絡ませている。具体的には、エントランス・コート領域と中心を知覚し、中心に接近し、また内部動線の中心となる円形階段室に接近し、階

段室での回転運動が行われる。この回転によって後ろにあったエントランス・コートが認識され、また旋回しながらライブラリー・コートに入り、中心と領域の知覚が行われるのである。即ち、全体を通して旋回による領域と中心の形成、中心への接近のプロセスが行われていることである

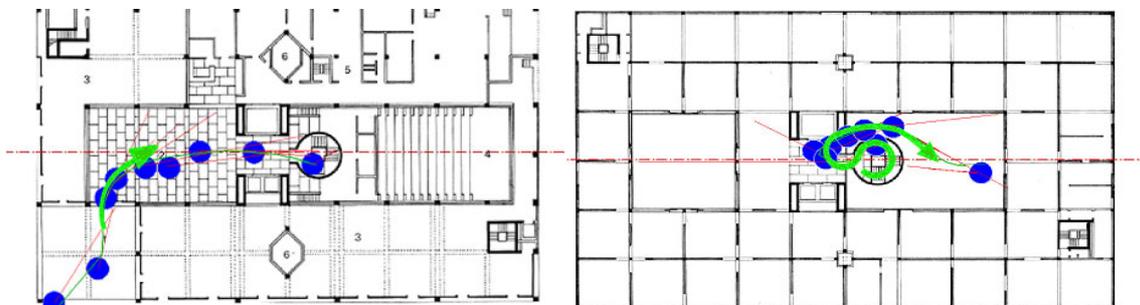


図8 内部動線のずれ

各段階の<ずれ>によって生まれてくる視覚像の特徴は次のようにまとめられる。

■アプローチのずれ／視覚像の回転と拡大

アプローチにおける観察者の行動は旋回と接近の組合せとなっており、それによって視覚像は回転と拡大する。建物は一つの外観をみせるのではなく、刻々と変わる多様な視覚像を見せることで、建物全体の明確な外形と細部の質感が知覚される。また回転運動の回転軸として、建物を貫く中心軸が現れる。

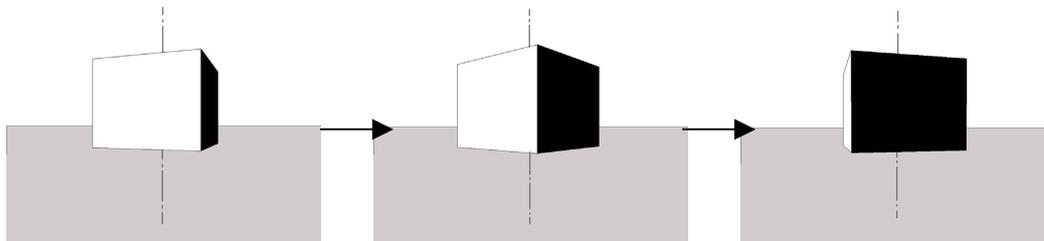


図9 視覚像の回転

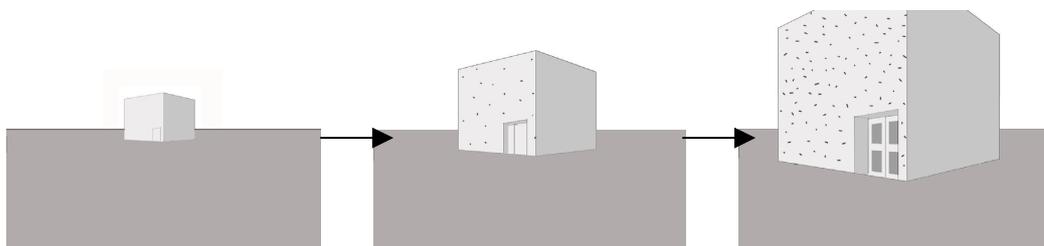


図10 視覚像の拡大

■エントランスのずれ／部分視が重なる全体像の形成と面が継的に展開するパノラマ

エントランスの隠蔽は視線の遊動を引き起こす。エントランスが主な視覚対象として限定されることなく、マスの隅々まで探索するプロセスを経て得られる部分視が重なり、外形の全体像が知覚される。

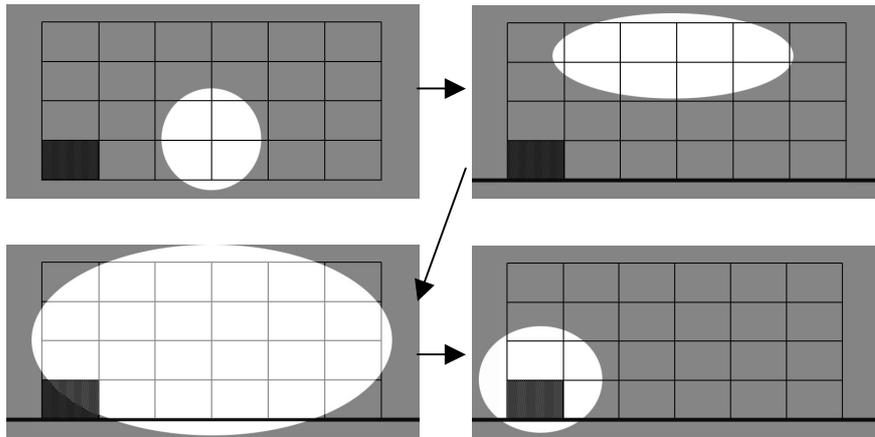


図 11 視線の遊動によるプロセスを経た全体像の形成

隅部に位置するエントランスによって視線軸も斜めに形成される。斜めの視線軸によって、視線は空間の軸方向に固定されることなく、旋回するようになる。この旋回によって空間を作っている壁などの建築要素が継起的かつ連続的に展開し、認識される。また空間を作り出している建築的要素に囲われた強い中心性を持つ空間の知覚につながる。

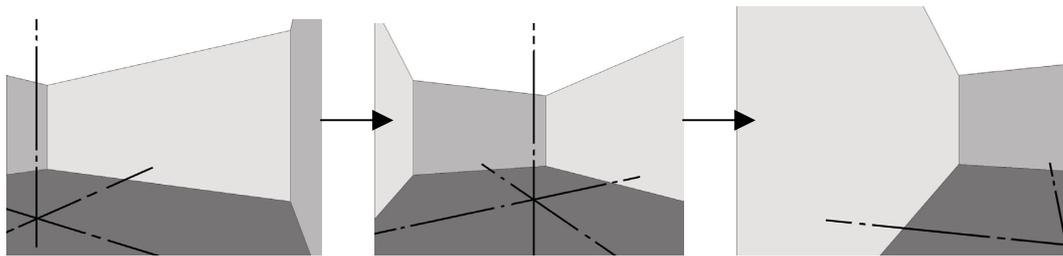


図 12 視線の旋回による面の継起的展開

■内部動線のずれ／視覚像の回転と中心性のある空間形態の認識に至るプロセス

中心空間への斜行ないし旋回する進入によって視線も旋回する。これによって観察者は明確な空間領域と中心を知覚し、次いで空間の中心に誘導される。このときの動線、視線の旋回は、上述した斜め視線軸によって知覚された面の継起的展開と空間の回転の知覚を一層強める。また、視点が軸外から軸上へ移動する過程における多様な視覚像からなる動的空間の認識を経て、一つの空間形態という静的な空間の知覚に達する。最後に観察者が空間の中心に到達した瞬間、これらの全プロセスを通して形成された一つの明確な領域と中心性を備えた、静的な空間形態を明確に再確認できるのである。

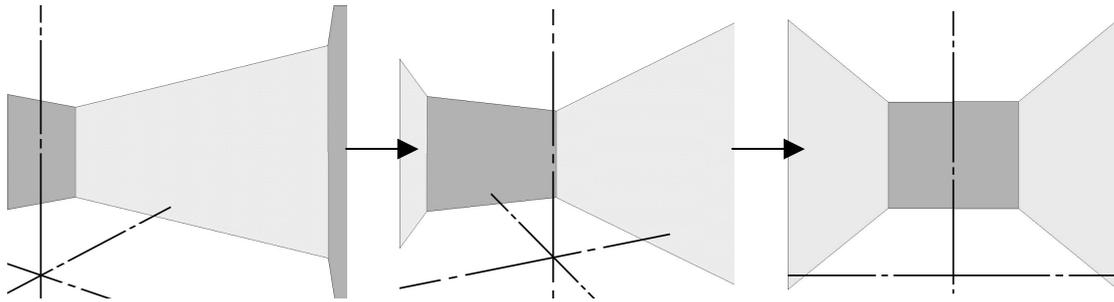


図 13 面の継起的展開とプロセスの結果としての一つの空間形態の形成

上述のように一連のプロセスを通して観察者はルイス・カーンの建築空間の知覚形態を認識する。外部から中心空間に至るまで、視線の旋回によって生じる視覚像の回転と、その結果として知覚される中心への接近によって生じる具体的質感と明確な中心性をもった建物外形全体、および一つの明確で閉じられた内部空間の形態が連続的に認識される。すなわち、多様な視覚像の知覚プロセスを通し、明確な空間形態と強い中心性を持つ「ルーム」の知覚に到達するのである。

カーンにとって軸構成は建築に永続性を与える幾何学的秩序、明確な構築性を獲得するための基本的な手段であったが、軸構成に基づいた平面構成は厳格な空間を作り出し、空間だけでなく人間の動きまでも支配してしまう恐れがある。また軸が強調されることでルームの性格が弱まる恐れもある。そこでカーンは「ずれ」の手法を用いたのである。外部のアプローチ軸から内部の動線軸まで、全体を通して行われた一連の「ずれ」の手法をみると、この「ずれ」が偶然発生したもの、または外部の条件によって必然的に生じたものではなく、カーンが意図的に操作していたことがわかる。

各段階でみられる軸構成に対する「ずれ」はいずれも人の動きを構成軸から離すための操作であるが、重要なことは人の動き、即ち視点が軸から離れることによって「存在形態」とは違う「知覚形態」が生み出されるようになったことである。

カーンの作品における「存在形態」は、幾何学的マッサによる明確な形態、構築性の表現による安定した静的で不変の空間、軸構成による求心性などの特徴を持つ一方、「ずれ」の手法から生まれる「知覚形態」は、明確な領域と中心を持つルームとしての空間像に至るまでの、人によって探索され、経験されて始めて認識されるような、多様で可変的な一連のプロセスである。

一つの物理的な存在としての建物に二つの異なる形態が共存する。それがルイス・カーンの建築作品の一つの大きな特徴であり、建物が人に知覚像を一方向的に押し付けるのではなく、人は建築の経験を通し「ルーム」の感覚を実感できるようになるのである。

即ち軸構成による厳格な建築空間における「軸構成に対するずれ」は、人の動きを通して初めて知覚できるような、いきいきとした空間体験を生み出しているのである。